奇抜な社会主義宣伝

直造は宣伝企画を担当していたので、映画の看板を請け負っている時には、それまでの歌舞伎調の看板をやめ、洋画風のごてっとした看板をこしらえて観客の評判をとったりしていたのであるが、口頭でも長谷川とふたりで組んで奇抜な宣伝をやった。そしてそれは自ら社会主義宣伝になっていた。

例えば戎館で上映予定もなく、映画会社も製作していたいのに、勝手に看板をこしらえて宣伝したりするのである。曰く「近日封切！　大塩平八郎の乱、――盗賊は大阪より紀州にあり――」曰く「嗚呼二〇三高地の激戦！　一将功成って万骨枯る」などと。〝大塩平八郎〟は大塩が「盗賊は大阪与力衆にあり」といったものをもじって言ったものであり、〝二〇三高地〟には死屍累々の兵士に、足をかけた将軍が剣を振り上げている状景が描かれてあった。

ある時、長谷川が土地のゴロツキにインネンをつけられたことがあるが、たちまちにして人だかりがした。それにヒントを得た長谷川と直造のふたりは、直ちに館の前で八百長げんかをおっぱじめた。

つまり一人が愛国論をしゃべると、他の一人がそれに反対して反戦論をぶつ。丁々ハッシかけあいでやっていると大勢の野次馬が集まってきて、議論が徹してくると聴衆のうちから声がかかった。かくして聞いているものは知らず知らずのうちに、社会主義の教育をされている具合になっていた。

大正元年（一九一二）十月、大杉らによって『近代思想』が冬の時代への挑戦として発行され、ついで大正三年（一九一四）には第三次『平民新聞』が刊行されて、直造は勇気づけられたとのことであるが、一方大杉の方とすれば、大阪の新開地が恰も初夏のごとく汗ばんでいるのに大いに動かされて刊行したということである。

この大杉の『平民新聞』であるが、一号から三号まで連続して発禁されたが、大阪ではいつも東京の発行日と同じ日に売られていた。その秘密は、久板卯之助とともに大杉栄の両腕といわれた和田久太郎の活躍にあるので、和田は印刷所で組版ができ上がるや否やその紙型をもって名古屋に飛び、名古屋の同志の横田宗次郎に手渡した。横田という人は愛知新聞の編集長で、彼は自分の地位を利用して秘密裡に刷らせ、それをすぐに平民新聞大阪支局の武田伝次郎の家と、押収された時の用意にと、もう一つの別のアジトへ送っていた。

その送られてきた新聞を小学生の吉三は、五部、十部と学校の帰りに取りに行き、カバンの中に入れて運んだのである。

吉三は親父の直造には、ようこき使われたようである。直造には、ならえとの間に息子が二人いて、長男が真喜三といい、次男吉三の三つ年上である。それが却って年下の吉三がよく用事をいいつけられたのは、やはりそれだけ使い易いし、人と接触する仕事に向いているとみたからではないだろうか——。

吉三は、学校が退けて家へ帰ってくると、直ちに映画館へいって、夕方六時ぐらいから晩は映画館の退ける十年半頃まで、看板のろうそくの灯の番をさせられ、親父のハンコのある半額券を

友達に売っては小遣いを稼いでいた。何しろ日曜日の映画館は千人余も入るが、週日は至って客が少なく、一日十人ぐらいしか入らない日もあるのであるから。

新世界の入口では夕刊売りにまじって『平民新聞』が売られていたが、これを売っていたのも実は吉三らであった。というのは、直造は新聞を受けとると、小学生の吉三とその友人らに売らせていたからである。その頃、夕刊が一部二厘しか手間がないというのに、直造は定価五銭の『平民新聞』を一部売って二銭の手間賃をくれたから、子供らは喜んで売った。二、三〇部ぐらいじきに売れた。売り終ると子供らは一〇銭もするうなぎの丼を食べ、それから直造のところでタダの映画をみにいった。

それが学校の先生にみつかって、叱られたことがある。「アカの新聞を売るなどとんでもない」と。それを聞くと直造は直ちに、アメリカ時代からの真っ赤なシャツを着て、学校へがなりに行く。「子供が新聞売って何でわるいんやあ！」そのために校長もよう弾圧できなかった。

長谷川市松夫人が街頭でコーヒーを売っていたというのも、この頃のことである。長谷川夫人は帰国するや家計を助けるために、新世界で屋台店を引きながら、まだその頃はさほど普及していないコーヒーを売っていた。そして客の顔をみては、『近代思想』や『平民新聞』やパンフレットをとり出して売り、一人、二人と仲間をつくっていったのである。

この屋台のコーヒー店から朝鮮独立政府上海グループの一人、テイ・ユエイ（日本名高山）も育っていった。テイ・高山は後に上海で水死体となって発見されたということであるが、社会主義同盟の時には日本の社会運動を視察に日本へ潜入し、逸見親子と会っている。ずっと後にわ

かったことであるが、大阪農民運動の草分け西納楠太郎もその時の読者の一人であったということである。

かくて大阪の社会主義は、最初十人足らずの非インテリ的労働者の間で育っていったわけであるが、このこと自体やはり大阪の社会主義の特徴をなしていると見える。

だが、社会運動にあってインテリのひ弱さは問題になるにしても、労働者自身のためのインテリジェンスは必要である。維新以後、ことに大正に入って急速に知的集約社会に化しつつある中で、自分たちのための知性と知識を持たないではやってゆけるものではなかった。中でも一番生活に密着してうるさいのが、法律問題である。

為政者は法をもって支配し、法によって裁く。ところが、肝心の支配され裁かれる側の民衆が法に暗いばかりか、さっぱり知識がないのでは損をするばかりである。それで大杉は、労働者のための「法律相談所」を設けたのであるが、これに呼応して大阪でも武田、逸見らによって同じく無料の「法律相談所」の大看板が挙げられた（大正四、五・一九一五、六年頃）。

僕等は社会主義者として斗争の経験から、
法律の何たるやを知っている。
彼等政府や資本家の作った法律で、
彼等を苦しめるのも一つの方法である。
諸君、多いに利用してくれ給え

本　部　武田伝次郎
南支部　逸見直造

この「法律事務所」にはむろん専門の二人の豪傑弁護士がついていて、諸事労働者の法律相談に応じたのであるが、この後直造はこの自分にあった格好の働き場所を得て大活躍するのである。「法律相談所」といっても、単に法律相談に止まらず、会社で指を落したとか、首になっても何の手当てもないといった苦情が持ち込まれると、直ちに直造は会社に交渉に出かけた。当人に代ってもめ事を引受けて解決してやるのである。

これはかのＩＷＷのやり方と同じである。ＩＷＷでは組合に相談しにくる者は、党派にこだわらず誰でも援助した。

大阪全市民を巻き込む

大正三年（一九一四）九月、大杉栄はそれまで刊行し続けてきた『近代思想』を廃刊した。『近代思想』は日本の知識青年には大きな刺激を与えてきたが、もはや多く文学青年相手では彼の実践欲が補足しえなかったのである。ついで翌十月十五日には『平民新聞』を発刊、今度は直接労働者に向けて訴えかけていった。

『平民新聞』がつぶされるや、『労働新聞』（大正七年）を刊行し、これも弾圧されると『労働運動』（大正八・十・十）をたて続けに刊行し、執拗に労働者に働きかけていった。

その甲斐あって『労働新聞』を出している時分には、大杉のいう大道飴売りの社会主義者渡辺政太郎を中心とする〈労働者のみの一団体〉、「北風会」も生れてくるのであるが、こうした背景には、まず大正三、四年頃からのデモクラシーの流行があり、後に米騒動あり、外からはロシア革命の成功があった。また第一次世界大戦による産業拡大とともに、急激な労働者の増加が、同時に労働者問題を提起しつつあった。

日本の支配者は大逆事件のフレームアップ（frame-up）をもって、強硬にアナキズムを中心とする社会主義を圧死させた積りであったが、さに非ず、数年ならずして却って社会主義の勃興期を迎えるに至るのである。

こうした一般状況の中で、大阪の逸見直造らの活躍も昇揚期を迎えるわけである。そしてこの昇揚期の中で「法律相談所」を設けることにより、帰国以来いわばアマチュア的活動家であったものが、プロフェッショナルな運動家となってゆくのである。しかもそのプロとしての運動は、一般大衆の市民問題を中心としていったところに特徴がある。

直造の法廷を使っての闘いは数知れないが、大きなところでは、大正五年頃の、大阪電燈会社を相手どっての「過払電燈料金返還訴訟」がある。この闘いは大きく世論を動かし、全市的な注目を集めた。直造は会社支給の電球があまり暗いので、アメリカの弟に電報を打って光力測定器を送らせ調べてみると、当時、電燈料金は光力六Wでいくらといったものが、何と五W以下である。直造はこれを会社の光力の詐取であり、電気料金は払い過ぎであるから料金を返してよこせと迫った。この裁判の判決は、「光力不足にしても、承知した電球を使用しているのだから提訴理

由があいまいである」と敗訴した。

すると直造は、すぐに訴訟内容をあらため、光力不足に基付く「電燈料金値下げ請求の訴訟」に切り替えた。同時に全市に電燈料の不払いを訴えかけたために、新聞は連日この問題を書きたてて応援した。そのため会社は、勝訴にもかかわらずどうにもならなかった。

そこで会社も裁判を延期し、示談の話し合いをしたいと申し入れしてきた。この使者にやってきたのが、大阪の国定忠次といわれる侠客小林佐兵衛の身内のナンバ福の舎弟である。彼は入口まで昔のマントを着てきて、脱ぐと下は首から珠数をかけた白装束姿であった。それで短刀を前にして、「逸見先生、手を引いておくんなさい。いうことを聞いていただけないなら先生を刺して、わしも死にます」と口上を述べたものである。

直造はこの男を前にしてたじろぐこともなく、「電燈問題は大阪中の新聞が騒ぎたてていることであって、俺の一存では何ともならない。大阪電灯が全新聞社と話し合って解決案を出してくれたら、私はそれでよい」とうまくさばいた。それで早速大阪電灯は大阪の新聞記者を全部集め、料亭で呑めや唄えの大宴会を催し、やっと八Wで従来通りの値段に据え置くということで妥結となった。

新聞記者団の案で解決したということであるが、実質的には直造の勝ちである。

そのほか裁判闘争で大きく世論を沸き上がらせたものにはもう一つ、大正六年（一九一七）、大阪市に対する「有価証券交換請求訴訟」がある。

大阪市電が五銭から六銭に運賃を不意に値上げして、旧回数券を二週間以内に使用せよと一方

的に通告した。市民の憤激に代わって直造が、「旧券でそのまま乗車させよ、または新券と交換させよ」と迫った。「回数券は切手と同じ性質のものである」と主張した。しかしこれは、直造の集めた回数券が一枚一枚バラバラの券であったために、それに目をつけた市側の弁護人である清瀬一郎（後の国会議長）が表紙なしの回数券は無効であると主張して敗訴してしまった。表紙にはそのような旨が条文として記してあったのである。

しかし直造はそれでも敗けていない。直ちに組合の連中の表紙つき回数券を集め、当人の名前を借りて、数日おきに地裁に持ち込んだ。いうなれば裁判のさみだれ戦術である。裁判所の方では、同じ系統の訴訟であるから一括裁判にしてくれと申し入れてきたが応じなかった。そのために市側の弁護人の数を用意せねばならぬわ、費用はかかるわでネを上げてしまった。

そして市民の声が沸きに沸いたところで、直造は「旧券でも市電に乗れるから、乗れ」とビラをまき、直接行動を訴えて、自らも実行した。市側は一旦（いったん）は勝訴したものの、やはり世論とたくさんの人間の直接行動にはどうしようもなく、車掌に黙認の内示をして、トラブルを避けたものである。

こうした直造の運動の取り組み方をみるに、彼はアナキズムの理解者らしく、原則として法律なるものを認めない。法律は支配者がつくるものであって、法律が一つ増えるごとに民衆はそれだけ苦しみが増すだけである。法律なんぞなくに等しくはない。中には法律がなければ斗（たたか）えないなどという者がいるが、それはウソであって、むしろない方が斗いやすい。なまじ法律ができて一定の枠がはめられてしまえば、余計斗いにくくなる。

直造は実際の斗いの中で、そう思っていた。しかしそれならば法律を一切無視するのかといえばそうではないので、「法律相談所」開設の宣言にもあるように、敵の武器をもって敵を撃つのも一法である、と考えていた。つまり法律というものをてんから認めていなくて、しかも都合のいいところだけはこちら側に徹底利用する。反対に都合悪いところは、いかにしてもくぐり抜け、法の適用をまぬがれようというのであるから、直造とケンカになった相手はどうにも始末に困るのである。

直造は、「法律に負けても、負けへん」と胸を張っていた。法的に負けたら負けたで、新たな詰め手を考え出すまでである。

それで大阪で逸見を相手にした会社は、弱ってしまう。しかしその点会社側の弁護士も心得たもので、向こうは逸見直造とわかるや、「相手が相手やから……」と弁護料を他よりも余計に会社からふんだくっていた。そのくせ裁判が長びくや大抵雇い主を説得して、「この辺で手を打ちましょ」と、直造の側に示談の申し入れをしてくるのである。その方が直造を相手にしては結局得策であった。

大阪のヤクザは東京と違う

ここまで書いてたまたま逸見吉三の聞き書きが手に入ったので、みてみると祖父喜三郎のことが若干出ている。これをみると、喜三郎という人は美代のむこ養子にきて、万事男まさりの美代のいいなりになっていたと思いきや、事業的にも思想的にもそれなりの関心を持っていた人であ

ることがわかる。その部分を抜き書きすると——

「祖父はなかなか目先きのきく人で日本でのこの商売の将来性に見切をつけ、亡命してくる政治浪人を通じて、朝鮮、中国へのランプの輸出増大を考えていた。すでに自由民権運動のシンパであった祖父が、大井憲太郎らを通じて、金玉均グループと交渉をもっていたのは事実であったが、しかし社会主義運動にはまだ全く関係がなかった」（「戦前大阪における社会主義運動の思い出」）

とある。これでゆくと直造の赤い血は単に母美代のみならず、父喜三郎からも受けており当時としてはなかなか開明的な環境を持っていたことになる。あるいは美代の存在そのものが、夫喜三郎の援助と支持あってのことだったのかもしれない。

ところで直造の背景といえばまたして大阪であるが、直造の能力と度胸もさることながら、大阪という土壌における対権力関係そのものが、東京とは余程異なっていたと思えてならない。むろんかつての江戸時代のことではなくて、直造ら近代においての話であるが、こちらが大阪人なら、向こうも大阪人というところがあった。その結果、相争う両者の間に東京人にない独特の人間関係がみえるのである。

吉三は「金余計とりたければテロやれい」とアジっていたそうであるが、直接行動の激しさとえげつなさでは東京に比してはるかに上廻っていたものの、その斗争心の中にはどうしようもない憎悪や対立というものがみられない。最終的には話し合いの通路があった!?

その点は大阪電燈事件のナンバ福の舎弟にもみられるように、ヤクザ（右翼関係）においても同じことがいえた。和田英吉氏によると、「大阪のヤクザと東京のヤクザとではまるで違う」そうで

ある。

「大阪のヤクザは東京のヤクザのように、左翼を目の仇にしない。お前らはお前らで商売をやってんだし、俺らは俺らで商売やってるんだから、お互い仲よくやろうじゃないかといっていた。」

女郎の足抜きの場合でも、むろん楼主は暴力団を雇って女を奪い返しにくる。しかしその時分には女はとうに逃がしてあるし、仮に家へ暴力団が押しかけてきても平気である。家の前には巡査が毎日ついていて、平生は一人、皇太子や天皇がくる時には二人いるから、「あいつらの立ちあいで話聞こうや」と持ちかける。こういう時には、張り番巡査の存在も有益なものである。巡査を前にして、めったにドスを振るうこととともならない。

そうでなくとも二階に組合の斗士連中が沢山ごろごろしているから、「ケンカしたけりゃ、うちの二階のもんとやりいな。数でしいな」といってやると、さすがの暴力団も参ってしまい、「そんなら折角きたんやから、何かおみやげくんなはれ」と言い出す始末である。みやげ代りに僅かでも金子包んでやると、それで向こうも得心して引揚げていった。大阪の抗争というのは、大体こんなふうなものである。

吉三さんの話を聞いていて面白かったのは、尾行の話で、追う者と追われる者との間にも完全な人間関係がある。いや、主客転倒で、追われる者が追う者よりも心理的に優位に立っており、逆に面倒みてやるような場面がいくらもあるのである。

吉三に毎日尾行がつくようになったのは、大杉栄虐殺後の福田雅太郎大将狙撃事件（一九二四）以後のことであるが、秘密集会なんぞに出たい時には、尾行に、「三時間ほど嫁はんと寝てこいや」

というと、「よそで捕まらんように帰ってきてくれ」と離れていった。どっちみち内緒の会合やる時には捕えてみても喋らんし、自分のメンツに関わらなければ、なるべく互いに仲よくしといた方が都合いいのである。

明日から大演習をやるなどという時には、尾行巡査は「皇族方お見えになるので、みな検束しとけいという命令でている。どこか他府県に一時逃げとくなはれ」といってくる。「お前ほっといてどないして逃げるのや」と聞くと、和歌山、奈良県へいって、向こうの警察に身分帳を渡して自分は引き返していった。そして大演習が終ると、また大阪に戻ってくるのである。

旅行する時なんぞも、尾行がついていると重宝であった。電車賃なんか払わないで済むからである。どこへゆくにも無銭旅行、ある時は東京へ行くのに神戸の港から船に乗って横浜へ着いたが、これが全部タダである。むろん尾行が自弁しているか、警察手帳みせて弁解しているのであろうが、そんなことはこちらの特権として構わんのである。

これも一つには尾行教育であって、日頃「俺のいうことときかん奴には、尾行させへんぞ」とおどかしてある。尾行はどこへでもついてきて、女郎屋へゆけば女郎屋の下で、女と寝ている間中待っているといったふうであるが、尾行がいうことときかんと困らしてやる。焼いも買ってきて、かじりながら毎日二里でも五里でも歩きづめに歩いてやるのである。すると相手はへとへとになって、「もう勘弁しとくなはれ」と泣きついてきた。

その代り可愛がっている尾行には、「今日は生駒さん連れてってやる」などと連れ出してやった。当時の尾行の手当てというのは大きくて、警官の初任給一ヵ月十五円（一日五十銭）ぐらいの時に、

一日四十銭も手当てがつく。他府県へ出ると二円も三円も手当てが貰える。それで給料が二十円でも尾行手当てが三十円越す月もあるのである。それを知っている吉三は、鉄道の沿線で勘定して郡山から奈良を通って生駒へ行った。すると尾行の巡査は一日八円から十円の手当てがつくので大喜びであった。

ある日、吉三の家へ尾行の嫁さんが裾模様の着物をきて、「主人がいつも可愛がっていただいておりまして……」と、丁重に挨拶しにきたというから滑稽である。

こうした大阪の運動家の対権力的関係を、権力との馴れあいととることは優しいことであるが、これが反対に本当の大阪人の斗い方であることがわかれば、そこに無限の教訓があるように思われる。東京人の真剣且つ深刻な斗い方は、直接中央権力と向かい合っているということもあろうが、江戸人の気質と同じく、直線的に過ぎてじきに折れ易い。それに反して浪華人のケンカは曲線的であって、犠牲も少なく長続きして効果も大きい。

『社会主義運動半生記』（岩波新書）の山辺健太郎は、若き日の大阪時代を懐古して、

「宗旨がかわったからといってけちくさいことを言うのはボルのほうだけであった。私が足袋工場をやめたときも解雇手当てをとってくれたのはアナの連中で、こっちからやめるというのにとってやると言って、靴をはいたまま座敷にどんどん上がっていったら商人上がりの工場主が、びっくりしましたよ。ブタ箱くらい、びくともしない連中ばかりなのです」

と語っているが、そうした思い切った直接行動をとれるのも、終局には山辺も他の箇所で書いているように大阪アナの人のよさというか、人間をまったくは憎み切れない心優しさにあったと

思われるのである。

大阪の米騒動の発端

先にも述べたように日本の労働者は、大正三、四年ぐらいから徐々に権利意識に目覚めつつあった。そうした動きを反映して、大阪でも、大正四年（一九一五）に労働者団体友愛会大阪支部が設立、翌五年には職工組合期成同志会ができている。

しかし当時の組合運動家の質はまだまだ幼稚極まるもので、西尾末広（にしおすえひろ）など資本家との争議の交渉に「モーニングを着ていかんとあかんのか」と心配した話など有名なものであった。むろんほんのひと握りの社会主義者はいるが、これも思想はかなり進んでいるものの、巡査二人くらい従えて却って得意満面とし、「オイ、もっと後ろへ退かれ！」といった調子で、まったく時には自由民権時代の壮士か国士気取りの調子であった時代である。

それが大正七年（一九一八）日本中を湧かした米騒動以来、急速に変化を起してきた。実質的に社会主義運動といえるものが復活するのは、これ以降のことである。それまでは組合運動といっても社会主義と殆ど（ほとん）関係なかったし、京大の学者や知識層ともまったく交流なかったものが、米騒動を介して結びつきだした。

それほどに日本の社会運動に影響を与えた米騒動であるが、大阪でも大規模な騒乱があった。八月十一日から十五日の鎮静に至るまでの延べ参加人員六十万～八十万人。約五百ヵ所で騒動、検挙者数二千三百人、起訴者五一一名という未曾有の数字を残した。前日十四日には夜間外出禁

止令が出、市電も全線運行停止、新聞は記事差止めであった。

この大騒乱の中にあって、当時の社会主義者がどの程度に役割を果したかということであるが、殆ど（ほとん）積極的な働きはなしていないとみられる（当局者側の詳細な調査資料にもそのように書いている）。騒乱中捕えられた社会主義者はなくもないが（東京、大阪各一名）、四六時中身辺を監視されている中にあっては、指導的に動くことなんぞ不可能というのが実情であった。大阪の社会主義者にしても同じである。

しかし米騒動における社会主義者の活動はまったくないかといえば、逮捕された者もいることでわかるように、そうでもないので、ある程度の動きはあった。ことに大阪では、暴動の火つけ役の一端を担っている。

というのは、大阪の米騒動の最中にちょうど大杉栄が来阪中であった。その時の模様は「大正八年一月一日調」の当局側の極秘文書『特別要視察人近況概要』によってわかるのであるが、大杉は妻伊藤野枝（のえ）、林倭衛（しずえ）（画家）とともに野枝の郷里福岡へ金の調達にいったが果たせず、帰途八月十日大阪に立ち寄った。

当日の大杉は「大阪毎日新聞社」の和気律次郎を訪ね、それから同地在住岩出金次郎（いわできんじろう）、武田伝次郎、逸見直造らを自分の旅宿に招き、旅費窮乏の状を訴えて金二十円の金を融通してもらい、翌十一日に野枝を一足先に東京へ帰した。そして十一、十二、十四、十五日と岩出方に寄宿し、十五日の日に岩出、逸見の両者から五円ずつ、京都からきた山鹿泰治に三円提供受けて、十六日に帰京した。

この間の大杉であるが、『近況概要』では、何事もなくてただ視察して歩いた程度のこととなっている。十一日には夜十一時過ぎ岩出、武田とともに暴動を見物すべく外出し、途中、日本橋筋で一巡査と口論し、難波河原において一団の暴徒が一米商を襲って米を廉売せしめている状況をみて帰宅している。翌日十二日も午後九時頃から岩出、逸見らと再び暴動の状況見物に出かけ、西成郡今宮町の貧民部落を一巡して後騎馬憲兵隊に追払われて帰っている。

しかし米騒動当時十六才で状況を見知っているし、父親直造から聞かされている吉三さんの話では、そんな視察程度のものではない。尾行をまいての秘密の行動があった。

大阪の米騒動は八月九日早朝不穏の状況の裡に一旦収まり、十一日夜に至って一挙に爆発するのであるが、この十一日の昼間、ゆかたがけの大杉が「親父おるか?」と家を訪ねてきた。「じき近くにいるから」と吉三が直造を呼んでくると、ふたりは米の問題を話していた。そしてふたりは「釜ケ崎へいこう」と、尾行にはふたりがまだ家の中で話しているように思わせておいて、見にいったのである。だが釜ケ崎の町を歩いてみても、いつもの通りで、さして変化がみられない。米屋の前にも人だかりはない。しかし裏長屋に入ってゆくと、二、三の女が井戸端会議の最中で、その一人が直造を見知っていて挨拶をした。

「あんたらどう思う。沢山のおかみさんたちが米屋をやっつけたこと……」

途端に彼女たちはしゃべり出した。

「一升二十銭の米が釜ケ崎では五十銭になっていまんねん。そいで二十五銭で売れというて談判したろ、みんなで押しかけようういうてまんねん。もうガマンでけへんわ」

この言葉を腕組みして聞いていた大杉は、突然直造を促すと、街通りへ出て人力車をつかまえた。そしてそれから人力車を待たせておいての、大阪の新聞社廻りである。

「今釜ケ崎では、米売れ運動が始まっている。売り惜しみしている米屋に二十五銭でありったけみな売れ、と騒ぎ出している。俺は今この逸見君と一緒にそれをみてきた。富山県の火は大阪にも飛んできているぞ——」

大杉一流のハッタリもまじえての煽動である。当時大阪の新聞社にはいくらも社会主義傾向の記者がいて、大阪電燈の時も盛んに書きたててくれたのであるが、この時も大杉の話を聞くや直ちに記事にしてくれた。二時に出る夕刊の赤新聞は大見出して、「釜ケ崎の米屋、二十五銭の値下げで売り出す」とデカデカと組み上げ、街頭で販売した。

そのため三時頃にはもう、今宮町住吉街道の米屋の前に男女三百人くらいの人間が集まって、一升五十銭の米を二十五銭で売れと強談判していた。「うちとこでは二十五銭では売ってはおりまへん。よそへいっておくんなはれ」と米屋が断わるのも最初のうち、恐れをなして二十五銭で一人一升だけと売り始め、そのうち群衆が金を払わずにタダで持ってゆきだすと、もう手はつけられなかった。

「もう米は一粒もありまへん」と断わる米屋に、「あるかないか、そんなら見せてみい」と数十名が店を打ちこわして乱入したのがきっかけであった。数を増した群衆は三隊に分れて七米店を襲い、口々に、「二十五銭で売れ!」と叫びながら米を持ち去っていった。

ちょうどその頃天王寺公会堂で犬養木堂一派の国民党が、米価調節市民大会を開いていたので

あるが、大杉はここへ部落解放運動の松田喜一らをやって煽動させた。
「おうい、演説会なんかくそくらえや。二十五銭で米売ってるぞう」
「どこや」
「大阪市内どこでもや」
この呼びかけに超満員の会場は一勢に総立ちになり、どっとばかりに外へ繰り出した。まず通天閣の前に集まって気勢をあげ、それから目的の米屋ばかりか、酒屋、炭屋まで行き当りバッタリに襲い始めた。挙句に、「湊町駅前の住友倉庫には米が一杯つまっているぞう」の声に、わあっと群衆は、住友倉庫に向かって流れ動いていった。しかしその前に住友倉庫前には大阪師団が繰り出されていて近寄れなかったものの、続々と集まってくる群衆は気勢を上げ、他の目標の米屋を狙って殺倒していった。

自分は実行派である

住友倉庫前の数時間にわたる群衆の石つぶてと連隊の空砲斉射による抗争が、夜が更けるとともに下火へと向かいだすと直造と大杉はすばやく家に戻った。
直造宅には大杉が来たというので武田伝次郎、金吹道昭、岩出金次郎、吉村於鬼也、山崎正二郎その他が集まっていた。それらと一緒に再び大杉は何くわぬ顔で町へ出かけて行ったのであるが、今度は尾行が二十人もいる。それで大杉は、
「こりゃ、ありがたい。こんなにたくさんで守ってくれるなら、大きに安心だ。諸君！　しっか

りと見物しようではないか」
と、さも嬉しそうに釜ケ崎中を歩き廻った。そして独人(ひとり)ごとのように「ウン」とか「よし」とか「なるほど」と相槌を打っていた。後をついて廻っていた署長が、「先生、もういいかげんにしてこのくらいでお引き取り下さい。何かが起こっても困るし、本部に知れると私の責任になりますから……」としきりとぼやいていた。
それでとりあえず、シンパがやっている旅館河内屋(後の西成警察筋向かい)に小憩することになった。
吉三はその時分はちょうどハイティーンの生意気盛りで、ただ夢中で大人の周辺をうろつきあちこち走り廻っているに過ぎなかった。
吉三が大杉に出会ったのはこの米騒動の時が最初であるが、びっくりして印象に残ったのは大杉が尾行を大喝した時である。一行について尾行の連中がそのまま家に入ってこようとするので、途端に大杉は怒った。
「お前たち、下っておれ！」
すると、その気迫に驚いた尾行連はハッといって二十メートルほども後ろに飛びすさっていった。その大杉のドモリ声が威厳に満ちていて、吉三は今も忘れられない。
その夜、更に山崎正二郎の家に移っての座談会では、大杉はこの米騒動がこれからの大衆運動の道を切り拓(ひら)くもとになること、この後若干の反動が起こってももう大衆の盛り上がる力は押えきれぬこと、われわれは本腰入れて一層大衆の中に入り込み、斗(たたか)いの先駆とならねばならない、

今日ほど自分は確信を得たことはない、などの感想を述べた。

みんなも米騒動を目のあたりにして興奮覚めやらず、口々に威勢よく意見を並べていた。

直造はこの米騒動を機会に、中心的「要視察人」になるのである。「要視察人」の法的意味あいはよくわからぬが、ただし言動によって、

(1) 急進的ニ無政府主義ノ実現ヲ期スルモノ
(2) 労働組合主義ヲ以テ無政府主義ノ実現ヲ期スルモノ
(3) 漸新的ニ無政府主義ノ実現ヲ期スルモノ
(4) 在米無政府主義者ノ一派

——等の六区別区があり、しかも各々「甲、乙、丙」の三ランクがあって、甲は前科のある危険分子とされていた。直造は「大正七年五月一日調」に入っていないが、米騒動を経た「大正八年一月一日調」には、(1)(2)(3)項の「上記各派に関係ヲ有スルモノ」の中心人物の一人として記してある。因みに大阪で挙げられてあるものは、

大阪　岩出金次郎（甲号）
同　武田伝次郎（同）
同　若林藤蔵（同）
同　逸見直造（同）

——の四人となっている。

同年の全国の要視察人は九〇一名、そのうち中心人物百三十名あまりの中に加わったのである。

これの理由といえば、来阪中の大杉との不穏不審な言動にあることは明らかである。

ついでに直造と大杉との間柄についていえば、お互いに陽的人間で太っ腹な点や人情派で実践的なところが似通っていて、ウマがあったようである。それで大杉は直造がプロアナキストでないにも拘わらず、来阪すればいつも直造を訪ねていた。

のみならず直造は大杉よりも年上にも拘わらず尊敬していて、十二日の暴動見物の折には同行の者に大杉を指して、「俺の親分や」といっている。全体として大阪の社会主義者はアナキスト、サンジカリスト含めて、互いに空気はなごやかであったが、米騒動前後から武田伝次郎、岩出金次郎、逸見直造の三グループに別れていた。このうち直造を中心とするグループが一番大杉に近くて、大杉が出した色々な新聞や雑誌の大阪支社は、必ず直造の方で引き受けていたのである。

しかしそうでありつつも直造は、同年九月二十四日、米騒動問題に関し検事の取調べを受けて、「自分は大杉のような空想的論者ではなくて、実行派である」と陳述しているのである。そのことを記している『特別要視察人近況概要』の逸見直造の項を全文書写してみると、次のようにある。

逸見直造（甲号、紙函製造業）ハ大正七年六月中自己ノ借家賃ノ値上セラルルヤ、資産階級ノ専恣横暴ヲ矯正スル為一般貧者ノ執ルヘキ一種ノ範ヲ示サソトテ訴訟ヲ提起セリ。逸見カ同年八月中滞阪中ノ大杉栄（甲号、東京在住）ヲ屢々訪問シ、尚同月十二日ノ夜大杉及岩出金次郎（甲号、時計商）等ト共ニ外出シテ米価問題ノ暴動ヲ見物シタルコト等ハ前項ニ記スル処アリシカ、暴動見物ノ際逸見ハ同行中ノ知人ニ対シ得意気ニ這ハ（大杉ヲ指ス）自分ノ親分ナリト語リヌ。同月

十五日大杉ノ出発ニ際シ金五円ヲ提供シ、同年九月九日右ノ米価問題暴動事件ニ関シ判検事ノ家宅捜査ヲ受ケ、更ニ同月二十四日検事ノ取調ヲ受クルニ際シ、『自分ハ大杉ノ如キ空想的論者ニアラスシテ実行派ニ属ス』ト述ヘタリト云フ

この直造のいう「空想的論者」「実行派」を如何ようにとるかということがあるが、前者は思想家、理論家、後者は現実派、大衆派と解すれば、それはそれなりに納得がゆく。周知のごとく大杉栄は幅の広い人で（当時アナ・ボルがそれほど明確に対立していなかったせいもあるが）、大正九年（一九二〇）十月には自ら上海に乗り込み、コミンテルンの極東ビューローから資金を貰ってきて、アナ・ボルの共同戦線（同年、「日本社会主義同盟」結成、翌年第二次『労働運動』刊行）を敷くような性格の人であったが、それでも直造の眼からみれば自分とは違うところがあった。

大杉と直造とは資質が似通っているといっても、片方は筆紙でたべるインテリ、他方は労働者（生活者）である。その両者の如何ともし難いその差は、そのまま運動の面にもにじみでてきたことは当然である。直造は直造で、自分なりに貧民の十銭、二十銭の大衆活動家の中にしか生きられないと思っていたことの現われが、「実行派」の言葉となって口をついて出たものであろう。

またそうした直造のプロパーな大衆活動を促すべく、住宅問題という大きな問題が直造の肩にのしかかってきたし、一方労働問題は労働問題でプロフェッショナルな人員が育ちつつあった。

その現われとして大正八年（一九一九）三月には、関西で始めて社会主義新聞としてサンジカリズム系の『日本労働新聞』が岩出金次郎らによって創刊された。同年、天王寺区伶人町に高野岩三郎を所長として、大原社会問題研究所が設立されている。ついで翌九年九月には荒畑寒村らが幹事となって小思想団体「LL会」というのができ、京阪神における日本社会主義同盟結成のきっかけをつくっている。

当時の関西の社会主義者の統一機関紙として『関西労働者』が発刊されたのも、大正九年から十年にかけてのことであった。